

竹亭の避暑

第四年級 中村祐寛

嗚呼驚かれける、あか淺ましや、簪鈴の響少しだに聞えぬとは、今日はいかあらむ、あつきの極かや。疊みこめたる様ある火雲大空を燎き焦して、些しの涼風、茅舎に來るさへもあければ、炎氣甚しく人に迫りて、身は恰も爐中にあるが如く覺え、心うるさく氣ふさがりて、文を讀まんとは、夢ばかりも心掛けざるあり。さればしばしが間も茅舎内に止りあへず、何にか涼を探らばやと、あちこち様々思ひめぐらしうかご、瀑布を尋ねんも山深くして路遠く、舟に掉して柳灣に遊ばんも亦近からず、誠に不幸が中の不幸あらむか。されど暑を避くるは云はすともが、竹亭に茶を烹たらむにはよからめと思ひ立ちて、直に竹林の一小亭に到る。

亭のたゞすまひを述べれば、我家の傍に綠竹植ゑてめたる小坡あり、亭は坡の中央に竹林に面せり、小くて三間ばかりあれど、綠濃ある竹影に隠れたれば、日の光だに洩さず、剩へ竹坡に沿ひて流るゝ小川ありて、水清く、且は細き田水の之に流れ落ちて細石に打たれつ打ちつ、自ら琴の調を奏す如きありて、誠に夏をよそある有様あり。

予襟を開きて寒水に濯ひ、疎簾を捲き上げ、淨榻の下に靜坐す、かゝれば林に滿てる清風涼を送り來り、頻に衣袂を拂ふ、忽にしてさしも苦しかりし炎氣名残あう消えはてゝ快限り無く、宛然として身は涼國にある心地す。

早前に設けし水は沸えたるあり、予は茗を二三椀啜りたるが、心淡くありきて、胸の中禪味を覺えぬ、詩をぞ作らばやと思ひしが知らぬ間に、眠を催して、予は終に夢中の人となりぬ、

やゝもすれば、夢は者の音に醒されぬ、音は何からむと、亭外を眺めやるに、これはこれ、一村雨の過ぎしからん、竹の綠りのいやまして見え、葉に残れる滴、蒼苔に落る音あり、此に於てか身も雨に洗はれたるが如く、心新に詩情頗る動く、時しも空晴れ渡り、十日あまりの月、竹梢よりさしのぞきて、殘の滴に映じたる様麗しからければ、一詩を書き付けつ、

枕水小亭涼味深、偶成一夢竹林陰、醒來乃識過疎雨、殘滴紛々月影臨、

雨の夕暮

第四年級 中川 醇

降りこふる細雨、岸の柳に玉をす雪のしとおちて、懶かりけるけふの一日は雨のうちに暮れあむとす、まだ宵ながら家々は戸を閉し、たまたま道行く人も「強き雨よ」とつぶやきつゝ急ぎ足に通り過ぎつ、軒端を傳ふ雨の滴の雨戸を撲つ音のみぞまさり行くある。

日は暮れはてぬ、思ひに耽りつるわれを聲高う父君の呼ばせ給ふまゝに、やをら立ち行けば、伯母君がりへ此文もて行けよとの仰せありき。

提灯片手に裳裾かゝげつ用意はよしと、傘半ば開けて家を出で常闇の町、北を指して急ぎぬ。家々の戸の隙より漏れ來る光に、をかしの談さへ豊かあるらむとおもはれぬ。日頃見あれし佐和山のやさしの姿、城山の艶ある面輪も、闇の闇のかたに隠れて、漆もて塗られたらむやうある空に、吹きくる風の折々細雨を齎らして、狭きわが袖のいさゝしうしめりを帯びぬ。只一人辿り行くわれは心細き限なく、我影さへうしろめたくぞ覺ゆる。かくて町はづれの明神の森程近うあれば、神燈の光木の間にはの見えていささびし、名は知ら

ねど、破れはてしなくやかある堂ありて、道のほざりにたてり、黒きものかげ堂のかたへに顯はれしと見るまに、早やわが足もどに迫りぬ。こはいと大なる黒き犬ありき。怪しと思ひけむ、しきりにわれをほへたて、追へども去らず、急ぎ急ぎ森をめぐり細き田のくろに出でぬ。かの犬は早や闇にその影を隠しつ。袖にしむ稻の香、あはれ今年も豊かあるらむ。見かへれば明神の燈火消えあむとして、吾が傘うつ雨しきりあり。いつしかわれは、かの村の口に着きぬ。伯母君の家はあらべる二軒目の茅にてふきし住居あり。かの笑聲のうちあるいと高きは叔父君にて、ほそやかにしのびたるは、伯母君あらし。傘かたへに置いて、戸口に手をかけながら、あかいしつる聲の我がうれしげありき。

湖のほざり

四年級甲組

橋本久一

神無月のなかばかりしも、八重霞たかびく卯月の如く、朗かにはれ渡りて暖き日ありき。われは久しきいたづきに、いたく衰へし身を、漸く杖によりて、我家より七町ばかり離れたる湖のほとりにおもむきぬ。汀には枯れたる芦生ひ、藍をときたらむが如き水の面は、折しも東の方より樹の間を縫ふてさしくる月の光に、さながらこがねの如く輝きて波うてるありき。幼きより、我は湖の邊りに遊ぶことを好みしが、今もかはらず。

われは、もと幸うすきもだえの子、さきにはいつくしみ深き母君に別れまゐらせ、後には浪風あらきうき世の大海に漂ひ出で、人の心の冷やかあるを視てしより、いと亡せ給ひし母君の戀しく思ひ出でらるゝ時、わが爲に、こよなき慰藉の默示を惠みしは、げに沙白く水碧りある爾ちありき。

あるは世の無情を憤はりて、我心臟は火の如くに熱しわが頭腦は、亂れていこの如きとき、波穩かに、白鷗眠れる、あれが平和の姿を眺めては、いつしか熱したる心臓も冷め、狂へりし頭腦も静まれるありき。かつて夕陽の影を望みて、この湖畔に佇みし時よ、遙かに權現山に落る日の光、斜影長く地に引けるを視て、はからずも、蜉蝣に等しき、人のさだめに感じて、をもはずも、双頬に涙の流るゝを得とめざりき。あはれあつかしき余吾湖よ。母あく友あきわれを慰めし、愛の女神にもにたる湖よ。さらばどこしあへに、あれは優しき心もて、われのごと、弱かるものゝ友とあれ！

田舎の舊趾と絶景

第四學年甲組

金谷杏甫

去ぬる秋、われは只一人旅路にさまよひき、四里五里とすき行く程に、路次第にわろくして遂に山と山との間に迷ひ入りぬ、老ひたる松、長け高き杉、鬱々として生ひ茂り、人影たえて折々あく鳥の聲に驚かされぬ、我はそゝろに塵の世を脱れて別天地に遊ぶが如き心地あむしける、それより下り行く事凡そ五六町、計らずも一の廢屋に出會ひぬ、其あたり草深ふして蓬生が柚、淺茅が原と荒れはてゝ人の住むべき所とも思はれず、噫恐るべきは時の力かあ、あはれ一時は愛も平和もありしものを、樂しかりしそれらは今は何所にか行きし、又其人は今も此世にありやあしや、誰に向ひて其昔を問はむ、鳥は話さず、草木語らず、噫變り易きは此世のさまよ、昨日の大夏高樓も終には柱たをれ、軒は落ち、壁も瓦も再び土とあへりて見るかげもあし。町時勢の進歩、社會の變遷、如何ある力を有するものぞ。

絶えず足を運び行くに、眼界少しく廣がりたる平地に出でぬ、茜あす日は西に傾きて豊旗雲うるはしく峰を彩り、前とは打てかはりし眺あり、萩、桔梗、女郎花ごり／＼に咲きそろひ、畔ある柿の木は落ち盡して紅實の夕日に映れるはえもいはれぬ風情あり、はるか小川の彼方には蕎麥の花白く咲き亂れ、其中に赤花入り交れり、之ぞ蓼の花にやあらむ、あたりには茅舎八九立ち並び、煙低ふ野をめぐりて枯れし柳にあびけり、東の方には幾百幾千の楓夕陽にあひて今を盛りと染めあせり、こを輝くこや云はむ、照るこや云はむ、まして此所彼所に賤が農夫の塵やく煙の立つ見えて、かの昔、酒暖めけむ事をと思ひやられぬ、折しも響く由寺の鐘の音に散りかゝりし落葉に、笠叩かる、通りかゝりし旅僧あゝはれ。

肝美ある哉、田舎の夕景、乾坤は宛然たる詩的美景あるかか、やがて農夫は尾花の波を渡りて歸り、四方は暮色につままれぬ、草葉にすだく虫の聲一入ものあはれに、賤が伏屋よりは臼する音、樂しげに謠ふ男女の聲聞ゆ、あまりの美景と物哀れある舊趾とにこころ空あれば足のはこびもはかざらず帽をかたむけ、かへりみし事幾たびぞ。

浪痕日記

第三年級 北村 力

今茲葉月十五日、朋友數名と竹生島に遊びぬ。連日雨あくして炎熱蒸すが如くありしがこの日も朝の程よりいそくるしく、晝間の暑さいかあらむと先づ心をいためぬ。

ボートハウスに集り、それ／＼準備をこころのへ、金龜の城を後に松原の川口を悠々と漕ぎ出でしは午前七時三十分を過ぎたる頃ありき。

磯山の岬と並行に西北に向つて一直線に竹生島をさして艇を進めつ。碧翠藍を流したらむやうある湖の面に行き迷ひけむ白雲の映れる姿面白く、さながら鏡のやうある水の面に旭日の影斜めに映じて黄金色したるを碎きゆくわが艇の進行。まして操る櫂に珠と散るある水の滴。各々興にのりてこゝろはこゝろ艇の早さも眼に見ゆるやうあり。遙かに見ゆる白帆の影二點三點、多景、白石もいつしかわが背の方にあり。折り／＼波紋をつくりて水の面にこきからぬ渦を畫くは小魚の群あるべし。

鴨にやあらむ、水をかすめて遠くわがゆく方をよぎりぬ。日は漸く高くありて暑さはいよ／＼まさりつ。流るゝ汗を拭ひながら漕ぎては休み、休みてはまた漕ぎゆく程に、影淡かりし竹生の島も漸く目前に迫れり。岸には數多の遊客數十の小舟をつなぎ、笛を吹き、つゝみを打ちあがして戯れ居れり。

思へばげにけふはこの島の祭りありしかり。うべ、竹生島指して漕ぎゆくある小舟の多かりしよ。かくて我が艇は漸く島に着く頃正午に近かりき。

全島、松、檜、竹あご茂りて滴らむばかりある翠綠、げに月夜の觀いかあらむと先づ我が胸に浮び出でつ、まいて危巖己れを空しうして飛躍せる壯觀。あゝ狂瀾怒濤、鳴號して弦月の影寂しく梢をもるゝ夜や如何に所謂、浮島と呼ぶは、遠くのぞめばその姿のいと優さしくて狂ふ浪、荒ぶ風にあがされやしつらむとあやぶみてあるべし。さはれ、そを近くあがむればその姿の豪壯あるに驚かざるゝあり。石階を登りて右折し、再び上りてまた右曲すれば、辨財天の社あり。これに參拜して更に道を轉じて下れば觀音堂あり。祭禮の事とて數多の參拜者にて容易く拜する事能はず。からくも參拜し終へて外に出づ。此の堂の右に津久武志摩神社あり、またこれに詣でもと來し道を辿り、參拜者休憩場にて茶を乞ひ、晝饗をしたゝめぬ。やがてこゝを辭して再び艇に移り島を廻りつ。かくて午後一時頃「さらば竹生島よ」の聲をのこして長濱に向ふ。

願れば竹生の島眠れるがやう静かある湖上に横はれり。一漕。また一漕、島の影は淡う淡う、かくて再び漂渺の間に浮べり……それはわれらのかの島と遠かり行くを以てありき。日の暮れあむとする頃、艇は金龜の古城を仰ぎてとめられぬ。われらは櫂を手に城の石垣に沿ふて歸りを急ぐにぞありける。

歸省の記

第三年級乙組

寺 本 仁 三 郎

回顧すれば凌ぎ難しと思ひし暑さも次第に消えて、楓葉の色いと麗しく見えし間もなく、霜を踏んで堅氷到る寒氣は愈々加はり、豫ては鬱蒼たりし森の木も、今は淋しき梢にたゞ風の鳴るを聞くのみ。

かゝる暑中休暇の後茲に百日、孜々として餘念なき學窓を出で、今や故郷の樂土に父母を省る、其の愉快如何ばかりぞや。

時はしはすの二十有五日つとめて寄宿舎を出で立ちぬ、曉風烈として肌に徹し其の寒きこと言語に絶えたりされど歸省の樂は勇氣を鼓舞して程なく彦根停車場に着きぬ、やがて汽笛一聲黒煙を後にして、金龜の城も見えずあり、何時しか目も及ばぬ廣野に出でぬ、夏の歸省にはこのあたり蒼々たる稻田にて、賤のおとめが歌唱へつゝ草花摘むあど、いとく面白く觀たりしが、己に收穫の終りたる今日は、たゞ行儀正しく並べる稻株の跡を見るに過ぎず、車中を見廻せば是皆吳客越人、識る人もあければたゞ沈黙を恣にするのみ、あはれ父母は如何に朋友は如何に、さては此處の山彼處の水と、徒らに郷里の思に餘念なく停車場を送りし程に何時しか汽車は八幡に着きぬ、郷里は此處より西北一里餘にあり、いでや健脚もて徒歩せんかと思ひしが、歸省者の常として寸時も早く足を家門に入れんとの心より、人力車にと打ち乗りぬ、既にして車は出町に至

りしが、當時此の町道路工事中にて路いと惡しと、車夫の言あれば、此處にて車を下り、家づと求めて急ぎ歩む、まもなく身は八幡町に出でぬ、町は郷里多賀村に接する市街にて、吾等が日々往きかひし小學校の所在地あり、されば街頭絡驛の人概ね相識の者あれば、頓首々々又頓首、屈める腰の伸びざるもおかしかりき知れる人の注進しけるにや、吾がおとゞひどもは門前に迎へ出で、吾を待ちぬ、即ち左右に携へて家に入る時に八時三十分ありき、斯くて愛すべき弟妹とくも此の冬季休暇を過しき。

春のたのしみ

第三年級甲組

飯 村 祐 念

四季の景色、其折々の樂みすくあからねど、分けて人の心の浮立つは、春の長閑ある日ありけり。

薄霞の棚引ける野邊に、胡蝶とくもにうかれ、あるは深山の梅をさぐりて、鶯とくもに花の香をしめ、あるは名所に櫻をめづるあど、一として樂しからぬはなし。廣き鳩の海原をかむれば、雲間に叫ぶ雁の聲、一むれ二むれ影きえて、白帆三つ四つ島のあたりを往來し、向ひの山は、霞の母に抱かれて、笑ふが如く、をちこちの眺め、春の景色あらぬはなし。

春も己に深うありぬれば、賤か軒端に咲く山吹の花散りて、春を惜む蛙の聲聞ゆ、しめやかにふる春雨は色もあく、いたづらに花を散らし、鶯は老を鳴きあむ頃、時鳥二聲三聲鳴き始め、人をして或は泣かしめ、或は樂ましめ、或は憂へしむ、其聲こそいとあやしけれ。

秋は四方八方の景色いと淋しく、月のさやけきを見るにつけ、錦の野山を眺むるにつけ、かぎりなき恨を生じ、かぎりなき憂を添へ、百草枯れて淋しき秋風の音と、蟲の鳴く聲とを聞くのみ。其他夏の暑さを思ふに

も、冬の寒さを忍ふにも、春のことの思ひ出されて、いと嬉しく、いと楽しく、また來む春を待ち兼てあむ。

あはれ

第三年級甲組 谷 本 眞 一

朝 露

あはれある哉、草葉に置ける露の命のはかきよ、人の命も又かくるかと思へばはかきものにこそ、わきて今わが履のもとにちりし露にござりてをや、まことかくの如きは、これを亂れたる世に生れてあたら戦場にあへなくありて、明らけく治まれる御代の今日を夢にだに見る能はぬ、古の武士にもたぐへんか、あはれと云ふもかぎりなし、

野路の白菊

あはれある哉、荒れはてたる野末にかをり芳しき、たゞ一本の白菊の花の、問ふ人もあくて空しく枯るゝ、あはれある、同じ香同じ色を持ちながら、人の園に作られて、朝を夕をあつき手入のもとに育ちし菊もあるものをされどこゝに心のまゝに生ひ立ちて、あつき手入はをろか、訪ふ人も手折り歸りてめづる人さへもあきこの花こそ不幸かれ、あゝ世にはまたこの白菊の如き人の必ずしもあしとせず、さだかからぬ隠れ沼に永くあらはれもせで、終に埋れ木のまゝ果てつる忠臣孝子等の偉人あるぞあかし、あはれもしかる人々が一度世に出で、その腕をあらはさるんには、いかばかり君の爲め國の爲めに、偉大の業をなすやもはかられざるを、あゝ野末の菊よりも又一入のあはれにこそ。

八重葎茂れる野邊のその中に

たゞ一本の白菊のはな。

静女緒環の歌後に書す

第三年級 高 岡 憲 治

妙舞羽衣にあらず風颯々、清歌霓裳にあらず花粉々、鶴が岡殿裡静女の曲、悽絶悲絶緒環の詠、古往を慕ひ今來を嘆く、情切々、暴威に畏れず勢權に屈せず、意悖々、晚翠雪を戴いて節操茲に高く、花顔露を含むで容姿茲に妍たり、心を悼ましむる哉英雄の末路、憐むべき哉佳人の薄命、今この歌章に對して微言數回、更に新愁暗恨を生ずるあり、俯仰低回、感慨胸に溢れ、涕淚襟を汚す、嗚呼此恨み纏綿として盡きざること緒環の糸の如き乎。

螢 狩

第二年級 野 間 莊 三 郎

おいゝ暑さ加はりて、日中は餘程堪へ難かりしが、日傾くと共に、涼風書窓を訪ひきて、いと心地よし。浴を終へて、獨り二階の欄にもたれ、暮れゆく西のあたを眺むれば、折しも、太陽は金色の光を久方の空に放ちて、くさゝの色に彩られたる、雲の間に落ち、世は常暗となりしが、暫くにして、東のみ空の雲間に新星一つきらめきぬ。今宵は陰曆十六夜、月もよし夕風をよぐ平田川に、螢狩りせば如何に心ゆく事からんと思ひしかば、吾は西峰子をそゝのかして螢籠片手に家を出で、星かげ暗き里の細路を辿りつゝ行くほどに、やがて十六夜の月は、佐和山の頂より、昇りそめ、あたり極めて明かく、涼風をよぎて、稻の葉末にさ

と波を起し、かあた、こあたに飛びかふ螢火星にまがひて、心地いどすがくし。
やがて平田の川邊につきぬ。見渡せば、久方の月明かにして、螢火消えんとする所、岸の青柳、枝長く垂れて、風ふくたびに水面を拂へば、蘆の葉、さわくさ笛の音を弄び、藍の如き河水は、月の光をやどしつゝ静心なく流れ行く。折しも光さやけき月は、立迷ふ雲に隠れて、影おぐらく。草葉にすだく螢の、光はいやまして明に、或は蘆の葉、柳の枝、さては影を水に落して、玉とゞび、星と亂る。

吾は西峰子と共に、螢火の光を慕ひつゝ、堤の上を追ひあるくに、團扇手にして螢を追ふ人、かあた、こあたに多くして。里の童の『螢來い……』の聲も聞ゆ、こゝかしこと、あさりあるくほごに、吾等が籠にも、漸く螢火加はりて、明又滅。

夜もいたく更けたるにや、今まで螢を追ひし人のかげもなし。月は中天にかゝりて、皎々として渡りしが、忽ち浮雲の中にござれて、静けさ限りなし。

吾はこゝを去るに忍びず、幾たびか歸らんとしてはたゆたひつ。されど、夜は既に更けたり、いつまで、かくてあるべきにあらねば、愈歸らんと心を定めて、此景色に別れの語を興へぬ。さらば、清き水、潔き月、さては愛らしき螢よ、多謝す、吾等に此愉快ある一遊を興へしを。こゝしへに幸あれ、かくて、又來ん年の夏再び吾等を遊ばしめよ。さらば、さらば。

吾は此の愛らしき螢を携へて、ふりかへりつゝ、家路に就きぬ。

夕立の記

二年級乙組

脇 利右衛門

行きかふ旅人の脚絆に砂ぼこりあつく、汗くさく薄黒き色したる手拭にて、おは流るゝを拭ふ百性の、いよ／＼むさくるしくおぼゆ。いづこのいたづらわらんべにや、二人みたりが案山子をめがけて小石を投げ付け、嘯と音せるに、嘯と打興じつ。日ばつと隠れぬ一面のあがめ、うすぐろし、とみれば一群の黒雲天を蔽ひて怪う雷聲天の一角より起り一時に百鼓の鳴りも物かは、さつと吹きくるを、しき風あたゝかき風に遠の山邊は早やうすゞみもて塗りたらんが如く、青き山の色のうす黒ふ、見ゆるに、懸て礫の如き大粒の雨降り來りて、庭前の朝顔も、むしろに干せる小豆も干瓢も竿にある衣も、あはや雨水にひたされんすさまに、しもべをみちの頭をかゝへて叫び合ひながら、むしろ、まさ、竿とるさま眼を細うして眉を寄せたる亦おかし。おちこちの家には雨戸を立つる音、天窓を閉す音俄に囂しう雨はいよ／＼はげしく盆を覆すが如し。往來には道行く人の跡たえて案山子ひとり悄然と傾けるまゝやう／＼に倒れざるさま、あはれに見ゆ。雲のゆきゝ早し、いよ／＼早し。雨緩あり、いよ／＼緩あり。半時ばかりにて、懸て晴れつ。いづこに雨やざりしけん、色赤き合羽着て水を踏む音たかく、河水を渉るが如し、もすそかゝげてをみちの又行ける、空の雲の色やう／＼霽れぬ、うす青きいろの、あらはるに、たちまち稻の穂、屋根のかはら、道路のたまり水、葉の木、びか／＼と光かれる、あざやかあり。いよ／＼あざやかにしてこゝちよし。學校がへりの、わらべ、裾まくり上げ囁りながら行けるが三人四人かあたの軒に消えつ。蟬又鳴き出だせる、障子にうつる枝のかげあざやかにさし入る。西日に。身も心も、さや／＼とこゝちよく草の葉、木の枝の、しげみの露みち／＼て、かのあつき砂ぼこりのたかくありしが、今いかに、こゝちよくおぼゆらん、よみがへりこそせしか。すゞ風そよど機のえの書をあほぐ。げにや夕立のあかりせば、水涸れ草死するや必せりさはかくとも此烈日炎天の時洒然一しきりの雨の水晴れては金露銀玉を草木にとゞめ地獄の呵責に妙陀佛の出現せられしが如き思ひあらしむ造

化の妙も亦ますく妙からずや、自倦み神屈する時一片の「夕立」といふ文字の如何によく凄洒たる精神を呼びて「あゝ降れよかし」と心に思はしめざるものあらんや。

「夕立やかみつくようか鬼瓦」

とさる名人のすさびも思ひ出でむらくと起るおもひを夕立のやう心して書き流しつ。

月

第二級 塚口佐太郎

嗚呼、月よ！月よ！余は汝を見る毎にかく叫ばざるを得ざるあり、汝の姿のいかに氣高く、且、貴きよ、され汝は吾が最も美み、且、哀れむものゝ一あり、或時は清らかなる空に照り輝き、或時は高き姿を雲の爲に奪はる、春は花と共に愛でられ秋は蟲と共に稱へらる、文人墨客を喜ばしむるは汝あり、悲しめる少女を泣かしむるも亦汝あり、夜陰寂々たる深夜に、汝の皎々と照り渡る姿はいと神々しく、暗夜に道を照らさば光凄からむ、汝はすべて物の思を極度に到らしむる者あり、盈つれば虧け、隠るれば現はれ、花と樂を共にせんとすれば妨げらる、されど汝は賤しきを問はず、貴きを論せずして真如の光を平等に下界に與ふ、之深く吾感ずる所あり。

嗚呼、月よ！汝は吾最も美み、且、哀れむものゝ一あり、願はくは浩く、高く、且清らかに我地球を照らすこと永久あらんことを。

漢詩

壬寅九月 鳳洲先生、見惠竹深留客處及朝爽夕佳樓唱和集、拜誦數
四、恍然有接警咳之想、謹次瑤韻以乞正云

堦浦風光佳 先生久開塾 癸未新綠時 樓成雅而撲 海潮耳時傾 山翠手可掬 虛懷誰能儔 知己獨有竹

先生樂道厚 常期古聖心 授徒溫言貌 接客豁胸襟 微雨花如畫 清風竹似琴 諷咏旦復旦 書窓興味深

名教將掃地 寤寐不堪憂 學校與家塾 教育務藏修 登樓眺望豁 山海入雙眸 清閑聊遣爵 無復名利留

弟子千百集 誘掖流德澤 道義貫心肝 風流意所適 書詩雨瑰奇 文章富氣魄 東西過訪多 筆談驚清客

神暢茅海晚 氣爽貴峯曙 遺經深夜繙 早起凭欄噓 感慨無人知 豈求一世譽 此地宜托身 水碧沙明處

朝爽夕佳樓 在奈良

千峯積翠聳 百卉滿郊榮 古都風色美 占勝高樓成 公暇凭欄望 觴咏忘物情 朝瞰上嶽草 名古寺送鐘聲
夕陽春生駒 名歸鴉噪晚晴 經學補教化 文章答聖明 有時會高士 談笑訂鷗盟 應疑登仙去 雲烟机邊生

鳳洲先生評 次韻數章命意高雅與纖巧自喜者自異其撰

齋藤竹海評 天然好聯多不愧古人處千峯百卉二句筆力千鈞

聽杜鵑

第五年級 野村 靜軒

月照西山夜肅然。望卿情切聽杜鵑。五更未就家國夢。去國爲客已四年。

秋夜讀書

第五年級 近藤 兵一

四壁沈々夜正深。挑燈披史獨研尋。傷心豪傑幾成敗。哀叫雲邊度雁音。

離別

黯然分袂轉傷悲。惜別牽衣拭淚時。三疊離歌橋畔立。斷腸愁殺去舟移。

新年

旭旗風外日瞳々。萬戶迎新笑語中。盛德昌平皇澤遍。幾杯斟酒醉顏紅。

漢詩二首

第四年級 中村 竹坡

湖亭秋望

秋風蘆荻汀。漁笛靜中聽。檻外滄波盡。千山一樣青。

過古戰場

荒漠空原千里平。斜陽一半照孤城。松濤似語當年事。猶作三軍叱咤聲。

漢詩

第三年級 飯村 吳山

櫻花

雅態清姿絕世塵。凡桃俗李更無倫。千里深霧芳山曉。百里凝雲墨水春。

琵琶湖晚望

晴空一碧水連空。天際茫茫望不窮。青島白帆波細々。宛然身在畫圖中。

新體詩

晚秋の幽谿

第五年級 澤村 胡夷

せうらぎの幽かある、
年わかき樵人が、
どこにはるけむや。

調だにひかすば、
憂ある眉のひそみも、

色うすき陽の光、
巖の根に斜にかまふ、

あかねの甲にうけて、
蟹の子が『冬眠』かゝ。

搖落の秋の風、
面やせし詩人が、
逍遙の微吟を聞かむや。

紅の葉を亂さずば、
岨つたひ苔のこみちに、

色うすき陽の光、
ほろゑひの鐘つきが、

鐘樓の晝射て、
撞木とる後ろかげ。

落葉のうす高う、
夕暮を急ぎ去る、
行く道に迷はむや。

谿路だに埋めずば、
山越えの旅商人が、

色うすき陽のひかり、
目に入るは鳥の影、

西山に沈みゆく、
きこゆるは猿の叫。

古城山の春 (舊稿)

第五年級甲組

大久保章彦

形見にのこるいし垣も、
いばら熊篠おひしげり、
一もと残る八重ざくら、
春來る度に咲き出で、

壊れがちにて苔くろく、
あれに荒れたる其中に、
見る人どてはあけれども、
昔あがらの香にふ。

城山

第三年級

村上義一

金龜の趾に來て訪へば、
城閣のみはのこれども、
みしらぬ草の花ほそし、
葎のあかにきこゆあり、
よもに繞れる堀のみは、
變れば變る世のあかど、
家路にかゝる折もあれ、
いつしか夕日影もあく、
ひゞく御山の鐘のねは、

石垣のみはのこれども、
苔むすいらか色あをく、
よわりゆくある虫の音は、
みさをと守る老い松と、
昔かわらぬふかみどり、
哀れこの世を忍びつゝ、
鴉鳴く音にみかへれば、
あたり淋しきたそがれに、
秋の哀れを打ちそへて、

文苑
諸行無情とつげわたり、

いとゞものこそ忍ばるれ。

五十

和歌

落花集

第五年級 野村 静軒

荒れ果てし不破の關屋に駒ごめて落武者詠みし昔をぞ偲ぶ
夕つく日かゝやきまさるささ川の朽ちし木橋に鶴鴒のあく
山茶花の色はあせけり贈られし友へかへしの歌あらずして
稻荷山もみちの奥もくみちして古き鳥居の見よくありにき
南天を日ごとくひくる鴈のこゑもさむけくゆきふりにけり
波怒るうちはら十里黄昏れてしほかせさむきはりま灘かか
一むれの水鳥たちて芦くれて主あき舟にあきかせぞふく

和歌四首

第三年級 高岡 憲治

夕日さす野邊の薄霧すえ消えて尾花淋しくあきすせの吹く (秋のあがめ)
ちとせとは思はざれども百年の學びのともと祈りしものを (友を吊ひ)
君のため思ひ立田の唐にしき匂ひめでたき末をこそみめ (友の遊學を送りて)

有明のともしび暗き枕べに聲もほそりてこほろぎのあく (虫のうた)

和歌一首

第二年級 石田 孝三

城山の鐘のひびきに誘はれて木の葉散るかり秋の夕ぐれ

俳句

俳句五

特別會員 樋口 無我

此月の九日は空いと清く氣も朗らかありき、我れ當地に來て未だまる一月にもあらねば、湖畔の眺望に飽きたるにもあらず、公園の風趣に倦みたるにもあらねど今日はまづ外の方へと、しきりに心動ける折柄、高宮の菊花、今を盛の色くらべと聞く、見物すきの我れ、いかでためらはむ、午後三時過、其處に名高き松月樓と云ふある菊花園に至りぬ、聞きしにも想ひしにもまさるかめ、うたと其色のえんあると香のいみじきとにかんじけり、歸るさ、汽車にゆられつゝ、思を教育の道によせたる俳句五をうめきだしぬ、無理にこじつけたるこそ我れをがらをかしけれ。

持前を見て育てけむ菊の主、
丹誠は秋のみであし菊の主、
菊ごりのほまれ世間に薫りけり、

油斷あき手にどの菊も育ちけり、
よき香には人の靡くや菊花壇、

拾穂集

第五年級 野村 靜軒

白菊や國旗出したる草の庵、
猿曳の錢かぞへゆく暇か、
秋夜長し母の教ふる百人首、
雪の日や犬ころ二つ達摩一つ、
うづみ火や胡夷紅雨の歌がたり、
柳ちつて漁村人をし芦の笛。

除夜の鐘たのしみ嬉しみ教へけり

田のうねに茶の花咲けり古戦場

功成りて骨までさらす案山子哉

秋の川葉舟の主は蜘蛛にして、

友は四國われ九州にあり菊の秋、

拜殿に乞食のやざる吹雪哉、

媒拂古書を見て居て叱られぬ、

萬歳や宿から先えうつ鼓、

第三年級 小池 周藏

第二年級 重林 平一郎

第一年級 横田 諒圓



二日

『ひげ自慢』上の巻成る。この日學校にて居眠りて笑はる。三嶺子、議論に來り、議論せられて去る。貳錢五厘にて南天の一枝を購ふ。七日ぶりに風呂屋に出かけ、途中、下駄の鼻緒を切りて閉口す。

三日

馬淵胡笳子より端書にそへて雑誌のいちごを送り來る。仙蓼兄、笑ひに來り、笑ふて歸る。鬚髯自慢の材料を得んとて停車場に出かけ、車夫の喧嘩を見て歸りぬ。夜に入りて風吹きいで、終夜眠られず。

四日

『鬚髯自慢』中の巻成る。

五日

ひげのびること分にみたず。芹畝子。濃より歸り來り、吳水の宅にて、吳水、原田鐵舟、及び余と四人車座にかりて茶話會を催す。鐵舟子の蒸栗、吳水子の御所柿、賣れ行き最もよし。鐵舟子は脚氣を病み起居心のまゝからず、余、初めて鐵舟子と語り、そ

小品漫録



うすひげ日記

第五年級 澤村 胡夷

おのれ、ある日、床屋よりのかへり道、うすひげの残りかう剃られて心地あまりにすが／＼しかりければ、彼家へ行かむまたの日までの日記をものしてみむと戯れに筆をとりぬ。やがてその日を一日と繰り初めつ。

一日

この日『鬚髯自慢』てふ喜劇に筆を染め、うすひげ日記を思ひたつ。夕映子來る。胡風子來る。隣家の秀ちやん屏越しに小石を投げ入れて植木鉢を一つ、余、五拾錢の商ひをしてのけたりと獨言く、されど破れしもの致し方あし。日暮れて馬場孤蝶先生より端書來る。水がめの小菊一つ咲きぬ。

の快活あるをいたく喜ぶ。彼れも楽しげに語りぬ。

六日

仙夢兄の居城を驚かさんとす。兄驚かず。蓋し不在ありしを以てあり。インクをこぼして教科書を新式に染む、(心中不平満々)。この日は厄日あり。眼鏡の椽をヘシ折り、不平の餘滴、罪なきステッキにかぶり、こは二つに折られぬ。花藻子日暮に來り、下駄を間違へて去る。不在中、芹畝子、書をのこして濃に行く。

七日

ひげのびること正に分に垂んとす。『ひげ自慢』下の巻に筆を染む。

八日

群咲子、余の死せる夢を見たりとて心配して來る。昔ながらの罪者の子よと、余笑ふこと限りなし。塘華子も來る。夜に入りて心澄み、空また澄み、月も亦澄む。仙夢兄來り、杖を城山に曳かむといふ。時に十時過ぐる半時、余も亦風流のヤマ氣を出して杖

に曳かれてゆく。歸宅、寢につき、恐ろしき夢を見る。

九日

昨夜囁言をうかれりとて家人に笑ひを受けたり。

十日

いとほしと思へばこそ、哀れの子よと思へばこそ、人を諫むる身あらぬわれの、涙を流していさめこそせしを、○○子、何と感じけむ、何と思ひふがめけむ、日毎に増する此頃のしらぐれ業。あふ、けふまたも、課業を缺きて○○○に眠をむさばれる彼を見たり。咄ッ、咄ッ、われ過りしかあ。われ過りしかあ。彼が心、例へば霜野の冷えたる石のやう、之れに觸るれば己が血潮、冷えて冷えて凍りぬべし。こを温めむこには、そが周圍に大きやかある火を焚かでは叶はじ。あふ、其れの如、其れの如、彼が心さても見すばらしう成り果てにける哉。終日思ひに沈む。夜に入りてひげ自慢の下巻を續けたれど、筆、澁りて思ふやうに運ばず。

十一日

余の脚氣にかゝれるを發見し、大に驚く。淡々子、之れを傳へ聞きて、余の居城を襲ひ、坐につくや、咳一咳して余の病因を説く。論するところ最も奇、その結論に言はく、これ君が作の『いのりの賦』に基因せりと、余啞然たり蓋し、かの詩は、

情の露にうるほして、友が脚氣のいたづきに、神よ、涙の眼をたれよ。希望もあはれ露の身の、葉末に噎ぶわれにして、やさしき友がいたづきに、寧ろ代むもいとほしを、あふ神、しばし『平和』の樂しき夢に愁ある、友が胸をみちびきね。を以て結べるが故あり。

十二日

風呂に行き、脚の痲痺せるにいたく驚く。心臓の鼓動異狀を呈せり。芹畝子書を寄す。

ひげのびて二分弱に至る。心地いそわろし。

十三日

水がめの小菊凋れて色褪せたり。南天の赤き實、机

に二つ三つ落ちぬ。貳錢五厘の枝、日あらずして空

しく桑畑のかあたへすてやられむとす。夕暮机によりて庭を打眺め居ける時、魘すちかひに庭を横切りて、鶏部屋の彼方に隠れ、再び圓やかあるその眼もてわがいろを覗ひつ。かくて其影を垣根に沿ひて閃然と没しぬ。山茶花のはちびら、靜かに散りて築山に亂れぬ。

日暮れて、幸なき友の運命を悲しみつ。終夜沈想に耽りぬ。

十四日

ひげのびて二分強、けふ塘華子見舞ひに來る。いとうれし。隣家の秀坊垣のかあたより鶏に石投げつけ余に叱らる。泣いて歸る。閉口す。

十五日『ひげ自慢』下の巻成る。脚氣ますますわろし。けふは終日臥床に横はれり。

十六日

ひげ三分に垂んとす。元氣や回復せり。長崎ある友より書狀來る。吳水子を訪ひ、歸路、ひげ苦にち

りて心地わろし、例の床屋に行き、再び無髻のわれにかへりぬ。胡風子来る。秀ちやん遊びに来る。夕映來らず。うすひげ日記、こゝに筆を投ぐ。

この記をうつしかゆる時、われの思はず胸せまりて、涙どままるべくもあらざりしは五日の一節にぞありける。

そは、わが鐵舟子が筆運ばせつゝあるいま、已に、已に、この世の人たらざるを以てあり。思へば實に人の命こそ葉末の露よりもはかきものか。あゝ安土の高嶺、中空を摩するところ、野州の流滾々として遠く遠く湖のかたへど流れゆくらむほと、一塊の丘土、長へに子が骸をみめて、子の影はついに、現世に見えずありぬ。あゝ、子の魂やいま何處にかさまよふらむ。瞑すれば子が豊かありけむ頰のあたり、清かりけむ眉のあたり、髭髯として今もかほわが眼にあり。

閑窓漫筆

第五年級 廣瀬文豪

詩人と哲學者

詩人は情を以て天地を歌ひ、哲人は理を以て宇宙を見る、即ち詩人の見る天地は甘くもあり、苦しくもあり、又辛くもあれど、哲人の見る宇宙は無味乾燥、冬日蕭條の林を見るが如し、されど、こは單に表面上の相違にして、よく其の蘊奥を究め、妙趣を解するに至れば、詩人も又哲理を説き、哲人も又嘆息宇宙の靈幽を謳歌す、畢竟するに詩人と哲人とは、其の門邊に於ては互に相反せども、一旦堂に入れば、二つながら一致するものあり、何ぞ絶對的に相反すると云はんや、借問す、現今詩人と自稱するもの、能く深遠の哲理を解するものあるか、哲學者と誇るもの能く天地の眞美を歌ふものあるか、

純正文學

文學は宇宙人情の眞美を由自に發揮するものあれば道德の羈絆外に立つは勿論のことあれども、徒らに

淫猥痴情を説き、以て得たりとするは之れ純正文學にあらずして、道樂文學とも云ふべきか、能く人情の蘊奥をさとり、天地の眞秘を闡明し以て宇宙の靈氣に觸るゝもの之れ實に純正文學あり、彼の蹣跚として一寸筆がまわれば、已れ早や文學者とありすまし、世の俗流に従ひ、意向を追ひ、以て世俗平々の徒の歡心を買ふに汲々たるもの何ぞ眞正の文學者と稱するを得んや、現今文學者の世に蔑視せられ、無用視せらるゝは實に此の腐敗、無主義ある文學者の多くして、頭角巍然天を摩する底のものなきが故にはあらざるか、あゝ文學者、文學者とあらんと欲するものは其の心に於て清澄無垢、高尚幽玄、世に屈せず、俗に阿らず、常に貧に安じ、苦に親み、不遇憾軻の間にありて猶恬然として、社會萬世の師表たり、標準たる覺悟をからざる可からず、しからざれば、似而非文學者の名を得るのみならず、俗を害し風を傷る實に之れより甚しきはなし、豈恐れざる可けんや、

文學は恰も激藥の如し

激藥能く人を殺し、人を生かす、故に之れを用ふるに當りては先づ其の人の病性を明にせざるべからずされど藥は其の味苦くして、且つ之れを用ふるには先づ其の適否を醫師、藥劑師に問ふものあれば、其の過ちは割合に少きも、文學に於ては然らず、甘きこと蜜より甚しく、且つ之れに耽ると否とは、偏に自心の判斷(多少師父兄の關涉ありと雖も)にあるものあれば、取捨の危きことは、實に赤子に毒を混じたる團子を與ふるが如し、豈恐れても猶恐れざる可けんや、然れども其の用法宜しきを得れば、以て國を興す可し、社會を進化せしむ可し、此の人の手加減實に六ヶ敷と云ふ可し、故に予は云はんぞ、中學時代の思想未だ定まらざる内は、常識を失ふの恐れもあれば可成的之れに近かざるが可あらんと、乞ふ教育の任にあるもの大に猛省せよ、

實用的文章

文章を作るに當り、徒らに綺語麗句を擇ぶは宜しか

らざるよふに思ふあり、如何とあれば、綺羅星の如く花の如き文は美は即ち美ありと雖も、こは實に庭園に於て人造的に栽培せし菊、八重椿の如きものにして其の美を除けば、後は何の價值もあきものなればあり、即ち之れ等の美は眞の美にあらずして、虚美あり、假飾あり、はげ易き美あり、厭き易き美あり、故に眞正の文章を作り、眞美を顯さんと欲すれば、汝が字句を擇ぶに先て先づ汝が心を高尚にせよ優美にせよ、しかれば、美辭麗句の如きは思はずして紙表に現れ、計らずして筆頭に躍らん、見よ古來文章家と稱せられし人は、單に其の文辭を巧に飾りしを以て其の名あるか、否皆其の精神に於て、遙に凡人とは異なる所ありしあり、あゝ精神ある哉精神ある哉、文章は實に精神の寫眞あり

活動時機(専門修學の或部分をも含む)

を永くせよ、

人世五十、七十古來稀あり、其の間に偉大あることをあさんとすれば、大器晩成あごとく吞氣あることを

り而して人最も之を賞し又最も之を忌むは三の數に若くものかし何ぞそれ奇ある。

人もし數を呼ばんか一二三と云ひ或は三五と云ひて必ず三を加ふ何ぞそれ奇ある、陽春三月の櫻三五の明月君が代の歌三唱と云ひ三献の酒目出度しと喜び三千大世界廣しと云ふもの皆之れ三を賞するものあり、然れども又三寸不亂の舌と云ひ錢三文と云ひ三尺の小兒と誇り或は三年の勞苦と悲しむもの之れ忌むべき者あり、朝に正月三ヶ日を樂み夕べに死後三ヶ年と悲む十一月三日は樂しき天長節三日月は望月にまさりて眺めよしとかや、造化の三神と稱し維新の三傑と贊し英米露を世界の三大國と云ひ三國對立と之を論す其他文化の三藏寛政の三助三奇士あご愈々究むれば愈々面白し何ぞ奇ある。

一の數に於けるやあまりに單純にして無味あり二は又優しく女らしく見え三に至て重複其中を得雄壯其内に備るものゝ如し。

吾が性常に怠惰に傾く一度之を鞭てども動かす二度

云ふは迂あり、或る論者は己れ一人にて成し得ざれば、之を又子孫に傳へよと云へど、子孫にして其の業を續ぐに足る可きもあきときは如何せん。(只學問の如きは例外なれども)故に人は一偉業をあさんとすれば、成るべく經濟的に修養し、以て活動時機を長くするを勉めざる可からず、然らば何をか經濟的修養と云ふ、云はく、迂遠あることはある可く避けて、切要あるものを多く勉むる様にするを云ふあり然るを徒らに養素々々と云ひて、繁雜ある普通科、縁遠き外國語あごを修め以て、必要ある時日を空費し、意氣旺るる青年をしてあたらし其の繁に苦ましめ未だ専門の學術にも入らざるに早や其の意氣を消沈せしむるが如きは、實に痛惜の至りと云ふ可し、考へざる可けんや、感あり之れが説を作る、

三の數に寄す

第四年級乙組 野村佐一郎

數に數多あり一も數あり十も數あり億も兆も皆數あ

鞭てども甲斐あし三度之を鞭打ちて初めて効あり是に於て一言を寄せて曰く「汝三の數よ汝は最も吾が敬愛せる所汝元來神妙にして且つ果斷の能あり能く吾を正道に導く汝の功や實に偉大あり然れども汝神妙あらば深く三省して再び我國内に井伊侯の萬延年三月三日櫻田門外に於けるが如き悲劇を演せしむる勿れ。」

端艇競漕會を觀る記

第二年級丙組 石田孝三

明治三十五年五月一日は、本校第十五回創立紀念日に相當するを以て、水上運動部は例により、山水明媚ある大洞湖上に於て、端艇大競漕會を舉行せらるゝ筈ありしも、當時新艇製造中ありしを以て、引いて六月十五日とはかりぬ。余は同窓數名と共に、本日は吾等の誕生日ありと、勇みに勇み、大洞に至り見るに、會場は湖の畔の小丘に設けられ、青松の間に、紅燈數百個を吊し、校旗の翻る處幔幕を張りた

る處、職員席あり來賓席あり、樂隊扣場あり、發艇準備場ありて會場の準備ことに整頓せり、又沖中には小舟の浮べるあり、之れ審判官の詰所あるべし。此日や、朝の間は少しく曇りたれども、競漕開始の頃には、天氣晴朗、湖上波穩かにして、青氈を敷きたるが如くありぬ。吾が四百の健兒は、けふ晴れの場所に於て、日頃鍛鍊せし鉄腕を試みんと、意氣軒昂。而かもボートは新造の三隻にて心も新しく花々しき競漕せし有様は、予が拙き筆墨もて満足にかき盡す能はざれども、その大畧を記さんとする。

第一回赤（沖）白（笙）緑（多景）の三艇には、各漕手同じ色分の競漕服を着け、早やゴールの前に並びやがて一發の號砲と共に、勇みに勇み、吾れ劣らじと進みしが、暫しありて、回航の頃より赤の元氣強く、八分三十秒を以て赤の勝とありぬ。斯くありて二、三、四、五、六、七、八、九回は了り、第十回の模範競漕とありぬ、さすがは、兼て鍛ひし此黒腕連日練りし此伎倆、いざ試みくれんと、一發の號砲

と共に進みしが、赤よ、白よ、青まけんと、應援の喧聲、或は岸に、或は沖に、ひゞき渡りてクラツチの音勇ましく、看る客手に汗を握り、勝敗如何にと看つめしが、遂に勝は六分三十秒にて白に歸しぬ。其より十一、十二、十三、十四、十五回は何れも劣らず、目覺しき競漕ありき。第十七回は來賓競漕にて、本縣商業學校と、私立第三佛教中學との對航あり、始めの程は、双方其勢強く、勝負判然ならず、回航の如き實に巧ありしが、歸航中佛中の勢頓に挫けしかば、遂に商業の勝とありぬ。第十八回は三、四、五年級の秀技手競漕にて、赤、五、（多）白、四（沖）緑三（竹）にて、之れも目覺ましく、之れ、當日第二に觀衆の目を引きたる競漕ありしが、勝は赤に歸しぬ。第二十回、此れ實に當日最後の競漕として衆人の最も注目せる、各級撰手競漕あり、赤、五（竹）白、四（多）緑三（沖）會場に翻々たる、名譽ある表勝旗は、果して何れの有に歸するものぞ、各撰手は徐々として進み、艇に乗するや、齊しく鉄腕を伸

ばして櫂を握り、平日の手鍊を現はさんと期するものゝ如く、意氣極めて壯烈あり。既にして號砲一發天に轟けり、三艇白波を蹴つて、湖面を滑るが如く進めり、舵手、漕手、意氣相合して。一呼、一漕、艇の行く事恰も飛ぶが如し、岸上に見るものは、或は帽を振り、或は手を拍ち、歡呼して赤！白！緑！と、思ひ／＼に應援す、暫く熟視してありけるが、

遂に、六分二十九秒にて、第一着は白に歸しぬ。會長は、其表勝旗を、名譽ある第四年級の撰手に授けられぬ。されば、四年級生徒諸君は、先登に表勝旗を高く掲げ、勇みに勇み、暮色蒼然たる間に歸られたり、其喜悅如何ぞや。嗚呼勇ましく愉快ある。且つ悦ばしき競漕も、城山の鐘六つを報すると共に尽きぬ。





本校日誌摘要

二月二十三日 寄宿舎講堂に於て、第二回父兄懇談會舉行
 二月二十六日 奈良縣敵傍中學校長宗像逸郎氏來校
 二月二十七日 愛知縣立第三中學校教諭佐藤正範氏來校
 三月二日 犬上郡多賀村大字敬満寺に於て兎狩を舉行す
 三月八日 茨木中學校教諭天坊幸彦氏來校
 三月十三日 第十六學年試驗施行
 三月二十一日 矢板本縣視學官來校(向十日間)
 三月三十日 第十四回卒業式舉行
 四月十七日 第十七學年始業式舉行、入學式舉行
 四月十八日 崇廣會總會開會、級長理事の選舉を行ふ
 四月十九日 級長理事の任命式舉行
 五月一日 本校講堂に於て、創立紀念式舉行
 五月五日 春季体格検査施行
 五月九日 岐阜縣立岐阜中學校教諭柳多元治郎氏來校
 五月十日 愛知縣第一師範學校教諭梅本龍太郎氏來校
 五月十八日 本縣商業學校生徒、本校生徒と劍道試合をなせり

五月三十一日 池田教諭入營、矢板視學官來校
 六月三日 平川山内大川三教諭新任對面式舉行
 六月九日 本縣視學官今井縣屬武田郡長來校
 六月十六日 大洞湖上に於て端艇競漕舉行
 六月十九日 服部青木佐藤三教諭依願免職
 六月二十一日 本校講堂に於て演說討論會舉行
 六月二十五日 米國農科大學生フエアチャイルド氏及東京帝國大學學生遠藤吉三郎氏來校
 六月二十九日 劍柔仕合大會を舉行す
 七月七日 矢板本縣視學官來校
 七月九日 本縣知事來校
 七月十六日 第一學期試驗舉行(向八日間)
 九月十一日 講堂に於て始業式矢板視學官臨場田中教諭新任對面式舉行
 九月十六日 矢板視學官臨場西村新任校長の新任對面式舉行

謹んで坂田先生を送る

暑烈しくて、人は箱根と呼び、大磯と叫び、避暑に狂してまた餘念あき折しも、生等が敬愛する、坂田先生の我校を去らるゝの、悲報を手にしぬ、嗚呼逢ふは別れの始めとは云へ、吾人今更感あきを得んや、顧みればはじめて先生にまみへしは、明治三十三年

の秋のかかば頃ありき、爾來學科に寄宿舎に、特に本部の部長として、大に畫策經營せられ、爲めに崇廣の光彩燦然として輝き渡りぬ、先生の賜や大あり、而して先生は之れが爲めに、痛く健康を害はせられ、生等大に心を痛め、密に祈る所ありしが、幸にして漸く快方に趣かれしかば、生等の喜び如何ばかりありしぞや、嗚呼其喜び今や南柯の一夢と化し、遠く先生を送らざるべからず、一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲む、みちるは多少の因縁による、況や三年この方、海山の恩を蒙りし生等、何ぞ至悲斷腸の感あからむやは、されど天あり、命あり、吾人また何をか云はむ、だく先生の懇篤ある御指導を謝し、益々先生の御健在を祈るにあん。(八月二十三日)

舊五年級雜誌部理事諸君を送る

理事

雜誌の事業、勞多くして功露はれざるは夙に識者の認むる所、之れが餘弊は往々雜誌部不振の嘆聲を發せしむるに至る。是れ吾人の常に憂へこみす所あり。

わが崇廣は爾來暇々乎としてその歩武を進め、號を重ぬる茲に十七、本會の盛運に伴うて益々其進境を見むとす。顧ふに本誌今日の旺盛を致したるは、一部長及び副部長諸氏の熱心ある執務に因るとは言へ、實に諸君が淡暗き編輯室裏に熱誠ある筆を行はれしに因らずんばあらず。已にして諸君は業を卒へて本校を去られ、期改まりて菲才の余等、誤つて撰に當り、諸君の志をついで筆を本誌に執るに至る。翻つて内心に立かへれば、吾人根然たるものあきに非ざる也。

さはれ、所謂、寸蟲も半寸の膽、小ありと言へ雖、吾人抱負あきに非らず、誓つて諸君の經營功績を空うせず、且つ其志を亞いて、將に吾人の信する處を實行せむとす。希くは諸君、余等が方針の將來に於て垂るゝ所あらば幸甚。

茲に一言を陳して諸君の功勞を謝し、併せてその健在を祈る。

◎義捐金 「吾人は、八甲田峠の悲惨を耳にし、壹錢宛の義捐金を募りて、第五聯隊へ送りたり」事實はこれのみ、他に何者もなし、言も簡あり、金額僅に十厘あり、

吾人は此外に何者もいふこと能はず、一言は涙のみ、壹錢は涙のみ、義捐金は涙のかたまりのみ、心中唯々これ涙のみ、

◎兎狩 連日の雪漸く消えんとするに、何んとして兎狩の命令あき訝しきよ、

命令下る、三月二日、多賀附近に於て行はる、獵師を僱ひ、以て此地の案内者とし午前十時頃より、兩軍に分れ、攻撃とあり、防禦とあり、荆棘の間を奔馳し、深樹を駆けり、山を攀ぢ、谷を下り、竹叢を蹂躪し第一回攻撃に於て二頭を逃がせり、二回、三回、漸く一頭を獲たり、四回、五回、又一頭を免れしめ、一頭を攫みぬ、午前十時より、午後四時迄午食を了へ、休憩をなし、狩獵攻撃せしこと、前後十余回ありしも、遺憾、敵

は二頭の捕虜を犠牲にして他は早くも他山に移れり是非なし、兎を獲るに夜戦は不利益ありと、審我慢より出でし、奇妙ある野外要務令も發布せられ、況んや其内には兵糧の欠乏を訴ふる兵站部あり、手足の負傷を注進する衛生部あるに於てをや、是に於て兎狩軍は二頭の捕兎を先登にして歸途に就きぬ、吾人此行に於て獲しもの僅に二頭の兎、然れども吾人の精神の中に得たる幾多の獲物は到底筆紙に盡し得べき限りに非るあり、乞ふ又來年を期せん。

◎メタル授與式 三月七日本校講堂に會員一同を集めて陸上部メタル授與式を行はるゝその授與の理由と人名とを左に

品行方正學術優等身体強健にして野球に熟達せるを以て 山本小五郎(卒業生)

品行方正身体強健にして野球に熟達せるを以て 藤林 信教(同上)

野球に堪能にして人を率ゐるに足るを以て 白井恒次郎(同上)

品行方正學術優等身体強健にして劍柔兩道に盡力せるを以て 門根米次郎(五年級)

如上の諸君の名譽こゝに至りしもの豈に容易の事あらんや、辭簡ありと雖その受賞の理由は雄辯ある証明者あり、吾人また喩々を加へて諸君をけがすの愚をあさんや、欽羨々々

同時に二月中旬殘んの雪は垣根に消えやらで梅は笑めどもまだうら寒き頃を荒神山麓より本校に至る約二里半の間に行はれし遠距離競走の優勝者に賞品を授與せられたり、受賞の人々は

市橋庄三郎、藤居平三郎、濱野増平の三氏あり乞ふ健脚家諸君健在かれや、七寸の草鞋を穿てば思ふがまゝに山川奇勝を踏破するに足る雙脚を有しかがら何等ハイカラ的舉動ぞ、何等の醜態ぞ、近頃所謂デモ紳士のひそみに倣ひて、身學生としては必要もなく利益も無きに自轉車上鼻うごめかして街上風を切り行く懦弱輩あり、而して彼等の聊か横行を恣にせんとするの惡風潮あり、此時に當りて「海内を

踏破る七寸の鞋」を呼號する吾黨の選手は諸君あり他日健脚黨を代表して彼れ懦弱輩の荒肝を挫かんは諸君あり、重ねて乞ふ好漢健在かれや、

◎拾四回卒業證書授與式 春かれや、早春立ちて淺からず、事古りし東風ふきての梅花はちりぬ、櫻には今しばしかり、自然の花あきこのひまに

我校裡人事の花は莊高に幽麗に、前途には光明を抱いて、五星霜を秀麗ある湖國の天然を、手を携へての慘たる勞苦の後に咲き出でたり、このわか所謂人事の花とは、三月卅日舉行せられし第十四回卒業證書授與式を云ふあり、當日和煦の日曇を帯びたれど何處よりともなく、はた春の女神の懷よりや吹き立ちけん南風暖かに、今日卒業し給ふ五十一の寧馨兒が頬邊を掠め、會場は本校講堂、來賓は本縣知事代理として矢板視學官を始め、百餘名の紳士諸君ありて、一同着席するや君が代の三唱を終へ、校長恭しく勅語を奉讀せられ、續いて卒業證書を授與せらる其れより本年間學事報告及卒業生へ訓示ありたり、

右了りて長官及來賓の祝詞卒業生總代の答辭ありて此に再び「君が代」を三唱し、各年級正副級長及び一年間無欠席者、崇廣會各部理事をぞに向つて、過去一年間の勞に報びんが爲め、各賞品を授與せられ茲に全く式を終ふ、式後例に依り、來賓諸氏及卒業生一同を別席に延き茶菓の饗ありたり、左に今日の卒業を修養の一段落として、更に精進の力もて成功の眞珠をさぐるべく、それらの海に深く沈み給はん諸君の名を

府縣郡市別	姓	名	年	齡
愛知郡	廣瀬	助一郎	一九、〇〇	
野洲郡	岩田	榮太郎	二一、〇三	
愛知郡	廣瀬	勘次郎	二一、〇三	
蒲生郡	福島	郁三	一九、〇四	
坂田郡	堤	直市	一八、〇四	
東淺井郡	下村	紫朗	一九、〇一	
東淺井郡	赤松	鑑	一九、〇一	
坂田郡	中澤	尙治郎	一八、〇一	

東淺井郡	佐野	善治郎	一九、〇二
兵庫縣	畑中	義雄	一九、〇七
甲賀郡	芥川	龜太郎	一八、〇七
東淺井郡	村上	善正	一八、〇六
坂田郡	寺尾	祐教	一八、〇七
甲賀郡	三木	謙吉	一八、一〇
福島縣	牛渡	日出太郎	一七、〇九
岐阜縣	小松	徹心	二〇、〇八
大津市	藪田	勘兵衛	二八、〇四
栗太郡	奥村	房治郎	一九、〇三
蒲生郡	山本	小五郎	二〇、〇四
大津市	林	富之助	一八、一〇
犬上郡	宮部	鐵三郎	二二、〇二
伊香郡	大音	政太郎	一七、〇〇
東淺井郡	徳永	永璣	二一、〇三
犬上郡	夏原	由三郎	一九、〇二
滋賀郡	岩崎	健三	一八、〇三
坂田郡	島田	善治	二〇、〇六

犬上郡	伊藤	國利	一九、〇四
愛知郡	三木	曾次郎	一七、〇三
犬上郡	磯島	喜六	二〇、〇三
栗太郡	藤林	信教	二〇、一〇
犬上郡	橋本	慎二	一七、〇八
東淺井郡	仙波	久良	一八、〇四
愛知郡	松居	源四郎	一八、一一
犬上郡	山上	晴雅	二二、〇六
鹿兒島縣	古垣	健熊	一九、〇八
神崎郡	宇野	順	二〇、〇八
甲賀郡	上田	昌雄	一七、〇八
野洲郡	廣瀬	懋	二一、〇〇
犬上郡	村田	滿正	一九、〇四
蒲生郡	西川	喜太郎	一九、〇三
野洲郡	白井	恒二郎	一九、〇九
犬上郡	松岡	勵	二〇、〇〇
犬上郡	今村	文碩	一八、〇三
犬上郡	江畑	一良	一九、〇二

野洲郡 小島 正之 二二、〇三
犬上郡 貫名 豐藏 一九、〇六
愛知縣 小川 吉郎 二三、〇六
大津市 安藤 保 一八、〇五
愛知縣 伊東 治郎 二三、〇二
坂田郡 藤田 義亮 一九、〇一
滋賀郡 山本 三郎 二〇、〇一

◎京都帝國大學第四回陸上大運動會
京都帝國大學第四回陸上大運動會は例年の如く、四月三日を以て同運動場に行はれぬ。本校は撰手として宇治原吉三氏、副撰手として北川九一郎氏、及び監督として廣田先生、外一名を以て、舉行に先つ一日、當地を出發せり。

三日 朝來曇天ありしが雨さへ折々降り出でしかば本日の催し如何あらむ、順延の不幸に歸しはせずやかど案せられしも、十時頃より西北の風烈しく吹きいで「西北の風、晴れ」てふ測候所の揭示、得たり顔ありしも心嬉しかりき。

思ひがけざる風に雲伯も驚を喫しけむ、何處ともかく散り失せて、麗かある春の光は、洛陽三十六の連峰に霞舞ける淡靄を匂はせたり。さて運動會は午前九時よりロンテニスの競技、午後より本競に移れり。

百米突徒歩、長飛、二百米突徒歩、捧飛、四百米突徒歩と順を追ふて進み、第六回は第三高學校の六百米突徒歩競走にして、スタートの號砲に我れ劣らじと勇みに勇んで馳け出す九名の撰手、壯快、人をして覺えず手を拍たしめぬ。第一着（阿部氏）、第二着（中澤氏）、第三着（南波氏）。次て千鳥競走、高飛（最高一米突九十二）、學士競走の數回あり、是に次で本日最も人目を引きし義勇旗競走は始まりぬ。ドンと一發の砲聲は近府縣中學校十三名の健兒を一齊に駆け出さしめたり。最初、スタートに於て、綠（京都一中撰手）へビーをかけ、他を抜いて走りしが百米突に至らずして制せられ、青白（武生中學撰手）はついで非常のへビーを出して一を制せんとする折

柄、綠は一目散に駆け出して、青白と其優を爭ひ、青白はたまらじとまたもへビーをかけて一時に之れを壓服せんと計る。かくて決勝線前二百米突に至りわが宇治原氏はへビーをかけて見る／＼三四人を抜きしが最後のへビーを出さむとするとき、惜しい哉氏はスタートの際に於ける脚部の負傷に思ふ様あるへビーを出す能はず、時に決勝線は已に百米突に迫れり。如何せむ。如何せむ。

かの青白は必死のへビーを出し、綠は最後のへビーを出してこれに亞ぎ居れりしが、何とかしけむ、突如として綠は一躍青白を壓し、青白はまけじものゝと之れに應じ、觀客の應援は激甚にして青！綠！あご呼はる聲、天地も崩れぬ計りあり。已にして綠は青白を抜く約一米突の差を以てラインに入りぬ。あゝ名譽ある義勇旗はやがて京都第一中學校に歸し終はんぬ。

健在かれや洛陽の健兒、明春更に吾人は卿等と優をこの運動場裏に爭はむか。あゝ中原の鹿、何人の

手にか落つる、京洛の快男兒！記憶せよ、吾人は卿等が建在を切望するものあるを

因云。大學對第三高等學校の綱引は三高の勝。かの啓發旗はまたも兵庫師範の手に歸したり。

また茲に撰手、副撰手二氏の勞を謝す。（こい生）

◎京都第三高等學校短艇競漕會

四月十二日、三保が崎に於て執行せらる、

我校は撰手を出せり、今其名を掲ぐ

舵手 整調 五番

田中藤六郎 中野 爲藏 岡田 橋彌

四番 三番 二番

賀來 俊一 花本 榮三 中川 作平

一番

竹内 賢吉

とす、四月の試験を了へ、日夜湖水にボートを友とし、朝は五時半に起きて、一時間の散歩をなし、六時半に朝食、又一時間の休憩をなし、八時より練習とし、午食一時間前に舍に歸へり、休憩して十二

時午食をなし、一時迄散歩をなし、一時半より練習四時半まで定距離、及び遠距離の練習四回、五時に夕食を食し、入浴を禁じ、夜間の外出は八時を以て限りとし、規矩一徹、食物は野菜を以て副食物とし、一定の茶碗、三碗の飯を定め、練習怠らざりし爲、三高撰手來彦の際、一片の賞讃を得たりしが、其當日、時節からぬ、電雪の降りし爲、我敵京中の、先づ歸校せしより、不得已、吾人は中止して歸校したり、

多謝す、三高諸君の懇切ある教授を賜はり、當日優待せられし事を、

吾人は又後日を期して大に奮發せんことを期す。
◎級副級兩長及び理事任命式 第十七學年、級副級兩長及び理事任命式は四月十九日本校講堂に行はれたり。左に各級、級長及び副級長の姓名を録す

（但し理事は別欄參照）

第五年級甲組級長

澤村 專太郎

同 副級長 岩崎秀一
 第五年級乙組級長 高橋茂十郎
 同 副級長 福井祐次郎
 第四年級甲組級長 藤谷三鷹
 同 副級長 久野 幹
 第四年級乙組級長 竹内賢吉
 同 副級長 廣瀬淵龍
 第三年級甲組級長 徳永乾堂
 同 副級長 西川脩三
 第三年級乙組級長 外村孝三
 同 副級長 西川長次郎
 第二年級甲組級長 野間莊三郎
 同 副級長 北川久一
 第二年級乙組級長 谷川寅吉
 同 副級長 木村勘三
 第二年級丙組級長 徳永 英
 同 副級長 石田孝三
 第一年級は第二學期の始まるや各任定せられたり左

に其姓名を掲ぐ
 第一年級甲組級長 北野憲三
 同 副級長 北村治郎
 第一年級乙組級長 高橋源次郎
 同 副級長 那須野一乗
 ◎入學式 霞たかびきよろすのとき四月十七日新入生の入學式は運動場に於て舉げられたりき、午前九時二十分云ふに、呼鈴を合圖に、右に古參生、左に新入生と整列す、此に於て校長は、いとも莊重に左の訓示を與へられぬ、
 抑も諸子の本校に入學するは、將來一人前の人たらむが爲めのみ、即ち紳士たらむが爲めあり紳士たらむには、獨立心を最も必要かれ、特に新入生諸子よ、諸子は既に中學生あり、今後決して依頼心あるべからず、己が事はおのれ自身にてあすてふ獨立心を常に持たれんことこそ願はしけれ、又古參生に望む、諸子は新入生に比して一日の長たり、されば此の新ある弟に對

しては、之れを善道に導きて、決して虐ぐるが如きことあるべからず、新入生も又慎みて古參生の命に従ひ之れを敬ふべし、
 右終りて新入生總代、下司義一君進み出で、挨拶を述べられ、次で五年級生徒澤村專太郎君、古參生を代表して、いとも懇に答辭を述べらる、此に於て目出度此の式は終りぬ。

◎始業式 入學式後、直ちに講堂に集り、第十七年始業式を舉行せらる、職員生徒一同の入場するや、例により君が代を三唱し、次で校長は恭しく勅語を捧讀せらる、右終りて校長は、懇々五ヶ條の訓諭をかし、深く將來を戒めらる、かくて後一同君が代を三唱して、全く式を終れり。

因に記す、當日は春季招魂祭あるをもて、式後一同は列を正して參拜せり。

◎本校創立紀念式 本校創立以來年を重ねる茲に十有五、日に月に隆盛を加へ改良振興して大に校氣舉れり、時は維れ五月一日、紀念式を講堂に舉

げらる、當日來賓には知事代理矢板視學官をはじめ郡長町長警察署長其他繕士卒業生等四十余名あり、職員生徒一同入場續いて廣田敦頭の先導にて來賓の着席するや、一同君が代を三唱し、後、廣田代理校長登壇して恭しく勅語を奉讀せらる、終つて來賓に挨拶を述べ、且つ生徒に訓諭する所ありたり。

◎体格検査 五月五日より向三日間、春季体格検査あり、一般に良結果ありと。

◎池田先生 離間の古鶯既に去りて萬野の綠漸く濃き時に當り、偶勤務演習召集あり、先生之に應じて歩兵第九聯隊へ入隊せられたり、爾後五旬生等親しく薰陶に浴する能はずと雖も、國家の爲め大に此行を壯にすべきあり、生等先生の益健全に此の大任を果たされ、一日も早く歸校教鞭を振はれんこと、遙かに希望して止まざるあり

◎三先生の送別會 青木服部佐藤の三先生は去る五月二十日本校を去り給ふこととされり、想ふに三先生の我が校に、教鞭を取られてより爰に數年